軽井沢シンフォニックコーラス
TUTTI 第６１号
2026.01.23

ブラボー隊

柴　澄（アルト）

ブラボーと喝采を贈り続けて早２７年、彼との出会いは彼が高校２年生で私はPTAコーラス３年目の時でした。

怪我で陸上部を休んでいる所、音楽の先生に声を掛けられて音楽部で歌って見るとこれは大変な逸材だと、音大を薦められて、高校２年生から、ピアノだの声楽だの一から勉強、レッスンに励み、現役で東京芸大に入ってしまったのです。短距離の選手だったので肺活量が多くその声量の豊かさは魅力の一つです。学生声楽部門全国一位他４つのコンクールで優勝に輝き、イタリア留学２年が与えられ、更に２年私費留学をし芸大大学院を卒業しました。卒業記念演奏として、芸大奏楽堂で百名程が招待され木の香りのする様な平面なホールで静かにブラボーと喝采を贈りました。

私達は後援会を作り、千人集めようと奔走します。今現在近づいています。私は幹事になり、コンサートの時は受付係、ブラボー係、お花の片付け等スタッフとして働きます。ブラボーと声を掛ける男性陣がいない時は、私達女性陣がブラボーと拍手と共に喝采を贈ります。でもブラボーと言っても良い時と悪い時があります。悪い時は京都清水寺の舞台での演奏は荘厳でブラボーは遠慮しました。１泊２日の予定で十名参加しました。金閣寺、二条城など巡り楽しい一日を過ごしました。また千葉成田山新勝寺での演奏でもブラボーは遠慮しました。美味しいうなぎを食べて満足でした。

最高のブラボーが出た時は“あついぞ熊谷”繋がりの岐阜での演奏会でした。バス２台で６０名の参加です。私は集金したり、名簿チェックしたり、バスガイドをしたりと大変です。上信越道で向かいます。丁度碓氷峠を通過する頃、私が『信濃の国』を歌いました。「皆誰でも歌えるんだよ」と言ったら、そんな歌があっていいネと羨ましがられました。この日は朝早く出発し夜遅く熊谷に着く強行軍でしたが名古屋名物の ひつまぶし に舌鼓を打ちました。東京文化会館での第九合唱ではバリトンソロでの出演です。第４楽章最初の出だしが彼のソロから始まります。緊張しますが、彼なら大丈夫です。最高のブラボーを贈ります。私も彼と一緒に何度か第九を歌ってきましたが最高です。

一番遠くへ行ったのは、彼が留学していたイタリア、パルマ音楽院見学と演奏イタリア７日間ツアーです。１２名参加です。大学見学と教授による生の授業を拝見し一緒にコヒー館で本物のエスプレッソを頂きました。これにより私はコヒー好きになりました。ミラノ・スカラ座でオペラを見学、ミラノ大聖堂ではエレベーターで屋根の上まで登りミラノを堪能しました。レストランではピザ、チーズ、ハムなんでも大盛りで食べきれない程でした。地下鉄でスリにあったり、タクシーに乗って遠回りさせられたり、怖い思いをし、お陰でコンサートではブラボーどころか、私達がふるさとを歌ったのですが涙を流しながら、歌った思い出です。

コロナ禍でもコンサートを開きました。千名入る会場では半分の 500 名にしました。チケットの半券に名前、住所、TEL を書いて箱に入れてもらいました。マスク手指アルコール消毒、私達はマスク、ゴーグル、フェイスシールド、マイクを付け、手袋、エプロンと物々しいスタイルで行いました。お陰様で一人もコロナ患者を出しませんでした。彼にブラボーを贈りました。

彼の指導による熊谷オペラ合唱団募集があり、私も参加する事にしました。7 ヵ月位練習します。フランス語の早口ことばに苦労しました。衣装や飾り花を用意し、いざ本番です。カルメンではピンクのロングスカートに胸には赤いバラを付け舞台はとても楽しく、病みつきになりました。蝶々夫人のハミングコーラス、ナブッコのイタリア語に挑戦し舞台に立っています。ブラボーを贈る側から、贈られる側になっていました。彼の指導は上手で、トークも上手なんです。少年少女合唱団他、十団体の合唱指導をしています。個人レッスンもしていて毎年一人は芸大へ入学させています。日本放送協会賞、三菱地所賞他多数受賞しています。昨年行われた秩父植樹祭では、天皇陛下御前で出演しました。関係者しか会場には入れず私達はビデオ鑑賞することになりブラボーはありませんでした。

高崎芸術劇場では椿姫、バリトンの彼は父親役です。ブラボーと喝采を贈りました。今年も椿姫出演が決まっています。ガラコンサート等でのアンコールは『オーソレミオ』です。ホール全体に響き渡り聴き応えは十分です。万感の拍手と喝采ブラボーを贈っています。

ブラボーとはイタリア語で「ブラーヴォ」 女性に対しては「ブラーヴァ」と言うそうです。

今までブラボーを贈ってきたホールは、金沢音楽堂、渋谷オーチャードホール、銀座博報堂ホール、ヤマハホール、大宮市民会館、川口文化センター、熊谷さくらメイト等数々のホールでコンサートを行って来ました。現在、土日のどこかのホールで演奏会を行っています。これからも私達は、第二第三の母である様に彼、原田勇雅さんを見守り、“ブラーヴォ”と喝采を贈り続けて行きたいと思っています。

音楽に満たされる日々（１）

映画から空中に流れる音まで　　**真崎 隆治（ バ ス ）**

佐々木さんが TUTTI に書かれた文を読んで驚いた。これほどクラシック音楽に造詣を持つ人にはそう出会えるものではない。私は音楽を聴く経験にはある程度自負があったのだが、おっとどっこいになってしまった。この驚きは大きな喜びでもあった。

佐々木さんは小学生の頃からレコードを多く手に入れて聴きに聴かれていたとのことだが、それらのレコードはお父上としばしば一緒に買いにいかれたものだという。ほほ笑ましくも羨ましく、心暖まる風景である。親子で選び抜いたその日の１枚を胸に抱いて、家に帰るももどかしく、蓄音機から流れ出る音にどれほどの思いをこめて聴き入っておられたことか。

僕の耳が音楽として最初に意識したのは、ベートーヴェンの運命交響曲の有名な出だし部分の「ダダダダーン」であった。その時の自分にはまだそれが「音楽」という意識はなく、音が、それもただの音ではなく、そうした音の塊りとなってぶつかってきてはじめて自分にとって意味をもつような特別なものとして感じられたにちがいない。その時からこの音の塊りは始終頭に鳴り響くものになった。

おそらく４歳のころであろうか。1942 年(昭和 17 年)、当時父は中国の天津の税関に勤務しており、この街の日本租界に住んでいた。はじめて聞いた音楽は、まだ日本にいた頃、母が赤子の私を抱きながら歌った子守唄ということになろうが、もちろんそれを聞いた記憶はない。だから私の音楽への意識はベートーヴェンとともに芽生えたというべきで、ベートーヴェンこそは私に音楽を授けた「運命の人」といえよう。

なぜそうなったかの詳細は不明であるが、多分４歳から５歳のときに映画を見たことによると思っている。父は映画が好きで、度々映画館に連れて行ってくれた。４歳から５歳のあいだで観た記憶にある映画は、「少年漂流記」、「カサブランカ」、「白雪姫」、「題名不明の中国映画」等々であったが、そうした中にベートーヴェンの伝記映画があったのだろう。映画の中身は何一つ覚えていない。しかしそこに「ダダダダーン」があった。

４歳から５歳のあいだと書いたが、実際には４歳のころと確定できるように思う。なぜなら、５歳のときにはすでに自意識がはっきりしていて、もしその時に観ていたなら、その自覚があると思うからだ。６歳のときは終戦の年で映画どころではなくなっていた。それと５歳の時の音楽への意識は映画でなく、近所の家からきこえてくるレコードの音と覚しきものによりもたらされていた。ヴァイオリンの美しい旋律がある初夏の午前の瑞々しい青空から開け放った窓に降りそそいできた。僕は窓辺に横た

わり、その旋律にうっとり聴き惚れていた。87 歳の現在からあと何年続くかわからない我が人生のなかでも、その時はもっとも幸せなひと時だった。作曲者が誰であるかなどは知らない。しかしそのメロディーは今でも口ずさむことができる。

【編集後記】

久しぶりに”音楽”のお話 2 篇

☆柴さんの「推し活」にワクワクしました。PTA の「母」としての喝采の日々。柴さんにブラーヴァを贈ります。

☆真崎連載の再開です。80 年以上前(！)の記憶の瑞々しさに脱帽です。天津の初夏の午前の風を感じてうっとり。(岡田)